

「子どもが育つ条件」を読んで

当 HP でしばしば持論として、教育、育児は、『育てる、教育する』意識よりは、『育む』意識が大切（HP「雑学 BN」の マスコミ等コメント関係（IV）、2007.10.17.：参照）」と書き、やりとりの過程

で助け合うことの大事さ（HP「雑学 BN」の覚え書関係（II） 2008.12.06.「『輔』けるという漢字を使う想いとは？」：参照）にも触れている

それだけに、教育、育児には、「これだ！」というマニュアルもなければゴールもないと考えている。

新聞書評の「せっかちな教え込みに走れば子育て不在を招く。自発的、探索的な活動を準備してやることの方がはるかに重要となる。

子育てから子育てへの視線の転換と並ぶ本書のもう一つの特徴は、『大人が育つ条件』への注目である。

本書は、親は子を育て、子は育てられるものだという関係の捉え直しを迫るものである。」が目にとまり、「子どもが育つ条件～家族心理学から考える～」を購読した。

筆者は、発達心理学、家族心理学を専門とする学者で、「育てる側の大人、すなわち親自身が成長・発達することが、実は子どもの育ちにとって重要であることも、今日の社会では殆ど認識されていません。

人間が誕生して死ぬまで、つまり子どものみならず大人も成長・発達する事実を確認する必要があります。

そうした認識に基づいた家族関係（親子や夫婦関係など）、家族と社会のあり方などを追求すべきです。」と述べている。

特に、社会の変化が父親自身、母親自身のアイデンティティや役割にどう影響しているかを、かなりのページ数を割いて解説している。

また、今の、またこれからの時代に生きる家族関係のあり方、つまり、子どもも父親も母親も、それぞれが一人の人間として、家族という関係の中でどう成長し合っていくかのヒントを呈示している。

本書は、最近しばしば耳にする「育児は育自」、「親の育ち直し」等の言葉の意味の解説書でもあるように思えた。

読み終わって、我が持論を後押ししてくれるものが一つ加わったような気がした。